

激励の言葉（初任者研修 閉講式）

先生方、こんにちは。一年間の初任者研修、たいへんご苦労様でした。今年度はじめて教壇に立たれた人は、子供たちから「先生！」と呼ばれることには次第に慣れながらも、とにかく無我夢中で今日まで来た、というのが正直な感想かもしれませぬ。私も教育長として初任者なのですが、残念ながら初任者研修がありません。4月以来、見かけだけでもそれらしく振る舞うことを心がけてきました。

本日この場では、私からの激励の言葉が皆さんにしっかり伝わることを心がけています。「法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない」。これは教育基本法第9条の条文です。皆さんは、教員採用試験に備えて勉強をする際、この条文を丸暗記して覚えたことと思います。表現自体が、まさに崇高な雰囲気のある条文です。

「自己の崇高な使命を深く自覚し」。「崇高な使命」ですから時代や社会に左右されない普遍性を感じます。「崇高な使命」と言われ、「ああこれね」なんて簡単にわかってしまうものは大した使命ではありません。私の使命は何か、そして私に何が期待されているのか。これからの教員人生を通じて、繰り返し問い続けていくこと、その問い続ける姿こそが皆さんの教員としての在り方だと思います。

「絶えず研究と修養に励み」。「研究と修養」とはつまり研修のことですが、分けています。研究と修養のそれぞれを明確に認識し、その上で一体のものとして励むことが促されていると思います。研究の形や内容、進め方が教員自らの生きる姿勢にどう重なっているのか。学び続ける教員とは、学び続ける先に何かがあるのではなく、学ぶその姿勢、過程そのものが重視されているのだと考えます。

「その職責の遂行に努める」。職責を遂行する、とあっさり言わずに、「職責の遂行に努める」としています。「努める」という言葉を使い、常に努力する姿勢を強調していると思います。一日24時間、一年365日、皆さんは先生です。休日に買い物をしているときも子供や保護者に会えば、その途端にあなたは先生です。その覚悟があつてこそ、子供に見せるに値する大人の背中だと思います。

さて、皆さんのこれからの教員人生はいつも順風満帆、というわけにはいかないかもしれませんが。楽しいことや嬉しいことがいっぱいある反面、辛いことや悲しいこともそれなりにたくさんあるでしょう。どんなに努力しても切り抜けるのが困難な状況に直面したとしても、私たちは怯むことなく強く生きていかなければなりません。本来自然の力が私たち人間をそのように支えていると思います。

私は高校に勤務した最後の二年間、生徒には「自分を信じる」ということをテーマに話をしてきました。私たちはどんなに辛く悲しい時でも、100%悲しいのではなく、悲しむ自分を見ているもう一人の自分がいます。さらにそのもう一人の自分を見ている別の自分がいて・・・自分の底の底には、それと名付けようのない何かがあります。それは誰にも共通な「ある力」であると考えます。

自分の根底にあって誰にも共通なこの力は、地球上の全ての生物にとって自分を生きることへと促す「ある力」です。それは本来自然に備わっている力なのですが、私たちは困難な状況に直面すると、一瞬その力を見失いがちになります。普段からその力の存在を何の計らいもなく素直に信じ続けることが大切です。

力のある人ない人という違いは、本来持っている自分の力を十分に発揮できているかどうかの違いであると思います。皆さんには自分の力を信じ、これからの人生を歩んでほしいと思います。せつかく教員になり、子供たちから「先生」と呼ばれる存在になったのです。今「先生」と呼んでくれる子供たちに対して、これからずっと「先生」と呼ばれる存在である義務が皆さんにはあると思います。

皆さんの教員人生は始まったばかりです。20代、30代、40代、そして50代、いつの年代においてもその時その時を懸命に生きてください。懸命に生きる自分の姿は記憶となっていくまでも残り、生涯にわたって皆さん自身に生きる勇気を送り続けてくれるはずです。皆さんのご活躍を心から願い、私からの激励の言葉といたします。本日は貴重な時間をいただき、ありがとうございました。